

『いづみの道』拾遺

天道 公平

「北上夜曲」に触発されて思い出した遠い昔の初恋の記憶を何気なく〈談話室〉に投稿したところ、思いがけない展開を遂げ、私が『いづみの道』（松蔭いづみ遺稿集）に出会うまでのいきさつについては、〈談話室〉の方に書き込んでおいたので、そちらで読んでいただくことにして、ここではその時書きそびれたことを書いておく。

もう半世紀近く前に、地方都市の片隅でひっそりと十六年と四ヶ月の短い生涯を終えたひとりの女子高生に手向ける鎮魂歌のつもりである。

骨肉腫に蝕まれ、右脚切断という大手術を乗り越え、何とか生きる意欲を取り戻しつつあった昭和五十年の一月、無情にも転移が判明し、余命半年を宣告された松蔭いづみさんのご両親は、当然のことながらその事実をいづみさんに告げることなど出来るはずもなかった。

あと数ヶ月の命であることを知らないいづみさんは、病が小康状態にあった二月頃に、突然手話サークルに参加するようになり、そのサークルが主催している手話教室に通い、手話の勉強を始めている。誰かに勧められたからでもなく、身近な人間に聾啞者がいたからでもない。自らの意思で選び取った行動である。将来を見据えての決断である。

片脚を失ってしまった私でも、他人様の役に立つことは何か出来るはずだ、私より困っている人の手助けになることが何か出来るはずだという思いが、いづみさんにそうした行動を取らせたのであろう。

そんないづみさんの健気な行動を御両親はどんな思いで見守って

いたのだろうか？ それを想像すると、私は溢れ出てくる涙を抑えることが出来なかった。

いづみさんの努力は決して花を咲かせることも実を結ぶこともない不毛の努力に終わるだろうことを、ご両親は知っている。しかし、そんな無駄なことはやめなさい、などとは口が裂けても言えない。温かく見守ることしかできない。どれほどの無力感に苛まれていたことだろう。

私は手話の勉強を始めたいづみさんの行動を美しいと思う。私の初恋の相手がこのような人であったことを誇らしく感じる。

私にとっては全く未知の言語世界である手話への道を指し示してくれた今は亡くいづみさんに心よりの感謝を申し上げておきたい。果たして、私が手話通訳のボランティア活動をするような日がいつか訪れるだろうか？



イラスト©草野義彦